

氏 名	ゲン 平
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	教 博 第 52 号
学位授与の日付	平 成 18 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	教 育 学 研 究 科 教 育 科 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	近代日本の中等・高等教育成立過程と折田彦市

論文調査委員 (主 査) 教 授 辻 本 雅 史 助 教 授 駒 込 武 教 授 杉 本 均

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、明治前期における中等・高等教育の成立過程を、第三高等中学校（1894年から第三高等学校）及びその前身校の変遷に即して明らかにするものである。とりわけ前身校を含め30年近く三高の校長職にあった折田彦市（1849～1920）の役割に着目している。

本研究は、序章と結章を含めて全6章によって構成されている。序章では、近代日本における「中等・高等教育の成立過程」に関する研究の問題点を指摘した上、本研究が研究史の上からは、狭義には旧制高等学校史研究の系譜にあること、広義には森文政研究の一環としてあることを、確認している。

第一章は、1870～76年の折田の米国留学に関わる事実について、彼の滞米日記やプリンストン大学所蔵の第一次史料を駆使して、教育史的に初めて解明したものである。それを前提として、帰国後、三高およびその前身校の校長としてなした種々の折田の教育実践は、アメリカ高等教育での彼自身の体験に根ざしたものが少なくないことを指摘し、日本の中等・高等教育形成にはアメリカの影響もあったことを示唆している。

第二章から第四章は、三高関係史料を駆使して日本の中等・高等教育形成過程を実証的に解明している。第二章は中等・高等教育模索期の1880年代、大阪中学校が全国の中学校の模範中学校として果たしていた教育機能を、校長折田の役割に着目しながら明確にした。折田の斬新な教育構想には、アメリカ留学時代の影響が強く見出せることを、その具体的実践から示している。

第三章では、大阪中学校を母体として設置された大学分校の、構想から実現に至るまでの諸草案を分析し、大学分校の性格と期待された教育機能を明らかにした。それを通じて、1880年代において高等教育機関の設置をめぐる折田や文部省または東京大学の思惑には一定のズレがあった事実を明確にした。

第四章は、高等中学校体制成立以後、高等中学校のあり方をめぐって第三高等中学校と文部省や他の高等中学校との間には理解の食い違いや矛盾があることとその食い違いの具体的諸相を明らかにし、その中で折田は、地方分散型の高等教育機関を志向していたことを解明している。

最後に結章では、本論文によって初めて明らかになった知見が整理されている。まず旧制高等学校史研究において、一高を中心とした従来の研究に対して、三高に研究の視点を置くことによって新たになった論点を明確にすることができた。三高の変遷過程を分析することを通じて、教育史における大阪中学校や大学分校の意義を検討し、中等・高等教育史研究全体のあり方を再検討する必要性を論じている。また森文政研究において、明治前期の教育模索過程の中で過渡期的とされてきた従来の位置づけに加えて、とりわけ高等中学校をめぐる折田が果たした役割はきわめて大きかった事実を初めて明らかにした。この事実を通じて、過渡的な措置として「高等中学校」が「中学校令」の枠の中に嵌め込まれるに至ったという中等・高等教育史研究の年来の大きな課題に、新たな解釈を試みることができた。

上記の新しい知見に基づき、近代日本中等・高等教育史研究において、以下のような仮説を提起することを試みた。まず、

そもそも森の構想した学校体系には「高等中学校」という学校形態が想定されていなかった。過渡的に設けられた「高等中学校」に対してもその専門学部が強く期待されていた。しかし、その後の事態は、「大学予科」コースが、実質的に「高等中学校」の教育機能を独占していったのである。専門教育の地方分散化の理想と、地方の大学進学希望の帝国大学進学への意向という現実との間に、大きな隔たりが存在していた。とりわけ京都帝国大学の新設は、1880～90年代にさまざまな形で模索されてきた「低度大学」や「コレージュ」構想が最終的に破綻したことを意味するとともに、近代日本における中等・高等教育の成立を宣言する事件として受け止められるに至ったことを述べている。

最後に、折田の中等・高等教育構想には、近代日本の高等教育史像を大きく変えさせる可能性も含まれていたことを示唆した。すなわち、折田の地方分散型の中等・高等教育構想は、高等教育の全国普及というシナリオを描くことが比較的容易であるという意味で、戦後の高等教育改革が求めていた新制国立大学設置構想と通底しているものと考えられると示唆して論文は閉じられている。

論文審査の結果の要旨

一般に近代後発国においては、大学教育と初等教育は、比較的早期に整備されやすい。これに対して、その間をつなぐ中間段階の教育制度の整備は後手に回りがちである。逆に言えば、教育近代化の成否は、中等教育の整備程度によって左右されることが多い。本論文は、教育近代化を早期に達成したといわれる日本近代において、中等・高等教育が模索、整備されていく過程を、主に第三高等中学校（1894年から第三高等学校）とその前身校（以下「三高」とする）、及びその学校長を30年近く勤めた折田彦市の視点から実証的に検討して、大きな成果をあげている。とくに大阪（後、京都）の中等程度の学校（前身校を含めた大阪中学校、大学分校、第三高等中学校）が、東京大学進学のための準備教育を自覚的に拡充させる方向と、他方で自ら高度化・専門化し大学昇格をめざした方向の、二つのモメントの間で揺れ動き葛藤を繰り返した歴史を実証し、克明に描くことに成功している。

これまでの中等教育史研究は、東京大学予科に母胎を持つ第一高等学校からの視点に偏って進められてきた。これに対して本論文は、中学校を前身校にもつ三高の視点からの中等・高等教育成立史の試みであり、その特質を一高との比較の相で意味づける手法をとっている。その分、中間段階の教育をめぐる先述の二つのモメントの葛藤やジレンマの問題を歴史的によりの確に捉えることができ、近代日本の中等教育成立過程の複雑な様相を、先行研究以上に具体的に解明することができた。この意味で、本研究の論点は三高に焦点化されているとはいえ、単なる事例研究にとどまらず、近代日本の中等・高等教育の成立過程の核心にかかわる論点を抽出することに成功しており、中等教育史研究に対する貢献は小さくないといつてよい。加えて、第4章では、岡山尋常中学校と三高、一高の学生の「連絡」（接続）問題を入れて分析している点も、各地の尋常中学校との関係のなかから高等中学校の有していた特質について、新知見を提示できている。

本論文は、第一次史料の収集とその丹念な読み込みにより、諸事実を確定していきつつ、その事実群の中から具体的な歴史過程を浮かび上がらせるという歴史研究の基本に、愚直なまでにのっとった実証研究になっている。その分、明らかになった諸事実は手堅く、今後の研究の発展の土台を築く作業として評価できる。とくに第1章では『折田日記』など米国滞在期の折田の個人史料、および留学していたプリンストン大学所蔵の「Orita Paper」や同大学関係の史・資料類を駆使しているが、いずれも著者によって初めて内容が紹介されたものである。第2章以降は、京都大学大学文書館所蔵の「舎密局～三高」関係資料を広範かつ丹念に調査した成果であるが、同資料群にもとづく最初の本格的研究となった。

本論文が明らかにした新知見は、その他にも少なくない。その若干をあげる。

(1) 折田の中学校教育改革は、彼の留学時、改革期にあった米国カレッジの教育理念の影響が一定程度うかがえることを示唆し、それらが一高とは異なる三高独自の校風の要因になった可能性を示している。例えば生徒取締りより生徒の利便性と自由意志を尊重する折田の寄宿舎観や体育の重視、あるいはキリスト教への寛容な態度などがそれである。

(2) 第3章で、1880年代半ばにおける高等教育増設政策とその実現への模索の多様な実態が、予備門の英語専修科構想、文部省の府県聯合高等学校案、折田の関西大学校案、森文相の五大学校構想などの競合の過程として解明され、その中で大学分校が成立してきた経緯と意義が実証されている。

(3) 高等中学校の制度の下で、これまでほとんど等閑視されてきた「設置区域」のもっていた意義を、入学試験（尋常中

学校からの無試験入学と委託試験)をめぐる問題と、大学への「連絡」(接続)問題の視点から解明するのに成功した。その結果、全国に5つ設置された高等学校が、たんに大学への予備教育だけではなく、ひとつの完成教育機関であること、さらに学生の東京一極集中を防ぎ、高等教育の地方分散化による地方の人材育成を目指していたことなどが解明された。これはこれまで評価が定まらなかった高等学校研究に新知見を開くものであると高く評価できる。

(4) 蓄積豊かな森文政研究は、森文政を森個人の思想的反映と捉えがちであったのに対して、本論文は、高等学校は森の学校体系の構想にはなかったことを明らかにし、これまでの森文政研究のあり方に一定の修正を迫っている。

以上の通り、本論文が日本近代の中等・高等教育史研究に貢献した点は少なくないが、審査の過程で以下のような問題点も明らかになった。第一に、第1章の折田の米国留学経験が、第2章以降の三高校長としての活動に十分に関連された形で展開されていないこと。特に地方分散化した「低度大学」の折田の構想が、当時米国の「カレッジ」のあり方といかに重なりいかにずれているか、寄宿生活や体育重視の共通点の指摘も、当時の米国の状況をふまえ、比較史的によりの確な分析を深めれば、本論文の価値は高まったに違いない。第二に、折田のキリスト教受容の経験をさらに掘り下げる必要を指摘する意見もあった。この点は、キリスト教とナショナリズムが衝突した内村事件をもつ一高と比較して、三高のもつ独自性を考える上に重要事である。第三に、一高と三高だけでなく、前身校をもたない高等学校との比較を射程に入れることで、本論文はより完成度の高いものとなると思われる。しかしこれらの問題点は今後深められることが期待される論点であり、上に示した本論文の学術的価値を損なうものではないというのが、各委員の一致した判断であった。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成18年1月5日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。